
赤いタマシイ/become to vampire

成茸 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤いタマシイ/become to vampire

【Nコード】

N1635I

【作者名】

成茸 ハル

【あらすじ】

高校に通う学生、一霧摘 瞳 きりつみ あきら はある夜、日常とは違った体験をする。

風の無い海、動かない時計、停電する住宅街。

どれも偶然で、どこか不自然で、しかし自然だった。

—— 何かがこの町に起こっている、そんな気がする。

そんなことを思いつつも、瞳は自宅のベッドの上、迫り来る睡魔に身をゆだねる。

翌日、連続殺人犯の殺人事件が起こる。

内容は、指名手配中の殺人犯が、惨殺死体で見つかった、らしい。

日常とはかけ離れた内容、何の変哲も無い自分たちには、おおよそ関係ないはずのその事件。なのに瞳は違和感を感じずにいられた。つた。

その違和感に駆られ、犯行現場に訪れた。

—— 其処には、血だまりの中で静かに佇む、少女の死体があった。

#OP きっかけのイヘン（前書き）

不定期更新、乱文の極み、よく分かりにくい表現など、おおよそ小説家志望の作品に相応しくないものになると思います。それでも興味のある方はどうぞ、見てやってください。感想、シナリオや表現に対しての意見などを頂けたら、馬鹿みたいです。喜びます。

#OP きっかけのイヘン

#

とても暑い夜。

寝苦しいなんてモンじゃない、中から熱が込み上げてくるような錯覚に襲われ、俺はベッドを抜け出した。

寝ぼけた思考で向かった先は夜の海だった。

自宅から徒歩5分で着ける其処は、昼間の輝くような青色を隠していた。

最近は熱帯夜が続いて困る、とタバコに火をつけ思う。紫煙までもが暑さを訴えるように、風の無い海岸でゆっくりと消えた。

この猛暑はいつから続いていただろうか。そんなことを思い出すのも億劫になるほど、まとわりつくような湿った空気は体中ののやる気を削ぎ落とす。

そんな頭だからか、海岸で潮風が全く吹かないという異常に気づくまで時間がかかった。

それがいつもと違うのはわかるのだが、それがおかしいことなのか、と聞かれたら答えはわからない。そもそも家から近いとは言っても、頻繁に海を見に行くことは無かったし、もしかしたら無風の海岸沿いというのはたまに在り得る現象なのかもしれないからだ。

もしかしたら、近代になって顕著に取り上げられるようになった温暖化の所為か。

もしかしたら、台風でも近づいていて、この無風は嵐の前の静けさを示しているのか。

もしかしたら、何か世界に居てはいけないモノが天変地異のような

ものを引き起こしているのか。

——もしかしたら、まだ自分は夢の中に居るのかもしれない。

暑い夜は嫌いだ。自分と世界との境界線が曖昧になるから。

バターのように融解して、今にもアスファルトに溶け込んでしまいそうな熱さ。

不思議と、強烈な日が差す日中より、蒸すような夜に限ってそう感じるのだった。

こんな熱い夜は、直ぐに眠ってしまおう。

思えばなかなか寝付けないから此処に来たのに、眠りにつくのが最善の方法なんて、馬鹿げてる。

そんな他愛も無い思考をゆらゆらさせながら、俺は散歩を試みよう、と思い海岸を後にする。

歩いて5分ほどして、ふと気づいた。

何で、波の音がしなかったんだろう——

あの小豆を転がすような音は、全く聞こえなかった。

まあ、そんな日もあるだろう。

そう、思うコトにした。

#1 日常の異変Ⅱ異常

#

町は、静けさを保っている。

異常とも取れる静寂は、おおよそ11時過ぎの町とは結びつかなかった。

この空間は図ったかのように、無人で、この上なく無人だった。

まるで、今日のニュースで、市民全員が夜間の外出を禁じられてしまったかのように。

こんな光景は深夜3時の町でもあり得ないと、脳内は意見を提出する。否定できる材料を持ち合わせていないあたり、この町は異常なのだな、とおぼろげに感じた。

適当な夜店に入ったところで、自分を出迎えてくれる人間などいない、と何故か断言できた。

きっと、これは夢なのだろう。

何かの間違いで、五感すべてが夢とリンクしてしまっただけの幻想なのだろう。

そうでないと言明がつかないし、そうでないと言明が持たない。

大規模な避難訓練に乗り遅れたかのような孤独。滅びる寸前の地球に、独り取り残されたかのような錯覚。

けれどこれが夢ならば、救いはあると思う。

何の変哲も無い日常に戻った時、自分はきっとより一層、それが大切なものだと実感できるだろうから。

——これがゆめならば、のほなし、だが。

ふと時計を見る。二つの針は12の数字を挟み込む形で静止している。

三つ目の細い秒針は、ちょうど6の数字から動こうとしない。

1分ほど待ってみても、結果は変わらなかった。時計はその針を縛られたまま、今も動き続けているはずの時についていこうとしない。

それはもしかしたら偶然、電池が切れてそうなってしまったのかもしなかった。

しかし、そんな都合のいい話があるだろうか。

……言ってしまうえば、それは俺にとって都合の悪い話でしかなかった。

不安が一層募る。いや、不安自体は今湧き上がったと言ってもいいならば、一層、という言葉は間違っている。

不思議なものだ。違和感を感じておきながら、俺は全く怖がりもせずに今までほつつき歩いてきたのだから。

考えてみれば、人や車すら見えない11時過ぎの大通り自体、不気味に感じないと言ったら嘘になってしまうだろう。

……或いは既に、俺はこの空間を夢と認識してしまっているのだろうか。

そう考えてしまえば辻妻は合う。夢なのだから危機感なんてものは沸かないし、現実味が無い光景を嫌悪無く闊歩できるのかもしれない。

嘆息と同時に、空を見上げる。滅多に姿を見せない天の川の全貌が、夜空の大部分を覆っていた。

ちかちかした眩しいほどの景色、星が落ちてきそうな錯覚に捕らわれるほど、はつきりと光の粒子が見て取れた。

ちかちか、ちかちか。

そんな音すら、聞こえてきそう。

——何故、町の中でこんなにも星が綺麗に見えるのか。

視界を降ろすと、町の明かりは、ひとつ残らず消えていた。

「え……？」

何故、というよりも、驚きの方が勝った。

そして、頭に残ったのは、明かりを消してしまうと、こんなにも目の前は暗闇に包まれてしまうのかという、感動にも似た感想だけだった。

…きつと、停電、だろう。

偶然、風も無い日に時計の電池が止まって、ちょうど停電が起こってしまったのだろう。

偶然なのだ、心配することは無い。

一歩先が見えないだけで、世界はまだ壊れて崩れたわけじゃない。

暗闇は嫌いだ。

自分と、世界との、境界線、が、曖昧に、なるから。

自分の目だけが宙に浮いてしまっているような感覚。
おかしい話、俺は自分の手足の感覚でさえ、忘れてしまっているのだ。

自分がどこに居るのかさえ分からない。唐突に、そんな迷子にも似た不安を感じた。

もう一度、空を見上げる。

空には、まあるい月が浮かんでいた。

…おかしいな、さっきあんなにきれいなつきなんてあっただろうか。

静粛に犯された空間。自分の耳を切り取ってしまったかのように、耳鳴りすら起こらない此处で。

夢に近い周辺。体なんて在りやしない、ただ頭だけ取り残されたような錯覚の中。

無味無臭の街の空気。乾いてざらつく舌も排気ガスのおいも消え去ってしまった星の下。

唯一働く視覚は、らんらんと輝く月と星をただ、見つめるだけだった。

綺麗な月だ。綺麗な星だ。

そうつぶやいて。

残された瞳は、そっと終わりを告げる。

日常の終わるか、それとも意識の終わるか。

これから眠りにつく俺には、いずれも関係の無い話だった。

#2 瞳の裏に広がる虚無

#

ふと、頬を誰かになでられた気がして。

そんなことで、悪夢から意識は覚醒した。

其処は未だ真つ暗で、結局俺は夢から覚めてないのだと確信した。もしくはまた夢でも見ているのだろう、そう思うことにした。

暗闇は依然として俺の体を包み、手のひらさえも見えないほどに目を塗りつぶしている。

此処はどこだろう。そう考えて、ふと自分を受け止めているそこがベッドだということに気づいた。

微かに香る焦げ臭いような、タバコの匂い。ごわついた手触りの布は、安物のシーツのそれで、体を覆うタオルケットは、長年使い込まれて所々ほつれてしまっている。

俺は自分のベッドの上に寝ていて、此処はやっぱり自分の部屋なのだ。手で周囲をがさがさと探してみると、触り覚えのある目覚まし時計らしきものが見つかった。

ライトのボタンを押し込み、時間を確認する。

文字盤は——浮かび上がってはこなかった。

「え——」

電池でも切れているのだろうか。いや、そんなはずは無い。一昨日に真新しい単三電池を2本捻じ込んだのは覚えている。じゃあ壊れたのか。しかし、時計が時を刻むかち、かち、かち、という音は聞こえてくる。じゃあ、ライトがおかしくなったのか。そうなのかもしれないが、LEDが壊れるなど果たして有り得る事なのだろうか。

カーテンを開けっ放しの窓から吹き込んだであろう風が、再び俺の頬を撫でた。

小鳥の囀りが聞こえる。もう朝が近いのだろうか、新聞配達らしき原付の排気音が耳につく。こんな暗闇で走行したら、事故になってはしまわないか、そんな場違いの心配をしてしまう。

そうか、もちろんライトは点けているはずだ。そんな心配など無用というものだろう。

……それは、ひどく、間違ってはいないだろうか。

何故、その点灯しているはずのヘッドライトの光が見えないのだろうか。

何故、夏の朝早くに日の出の光さえ視えないのだろうか。

何故、夢だというのに、こんなにも脳はリアルだと感じているのだろうか。

ひどく——悪い夢を視ている。

それは、目を包帯で覆った従妹の感想に似ていた。

暗闇、怖くて、自分の存在が掻き消えてしまうような、儚くて、自分が自分じゃなくて、それでも、夢じゃなくて。自分が居ないのに、世界は消えてしまったのに、未だ世界は続いている。

全ての辻褄を合わせる答えはひとつ。

——俺の視力は、失われてしまった。
本当にそうだろうか。

きつと、そういう夢なのだろう。趣味の悪い夢だ。

たとえそれが現実だとしても、自分の知らない環境に住まうことは夢に近い。

ましてや、いくら視覚以外が正常に動いているとしても、此処が確かな自分の世界だという確認は出来ないのだから。

瞳から得る情報は、存外に自己の重きを置いている。

触感や嗅覚、味覚、聴覚は自分と他との境界線を引くには役不足だ。例えば確かな自分という存在を持っているにしても、それは唯の思い込みに過ぎなかったりする。

目を瞑って街中を歩いたならば、自分の身体がまるで自分の所有物^{モノ}ではないような感覚に陥るように。

一歩先が崖だと思えてしまうような、世界の不安定さ。

確かなものは、何一つさえない。自分の体も鏡で確認できず、障害物が行く道を遮っている事にすら気づけない。触っているものは果たして生き物か、唯の物体なのか。友人は本当にその友人なのか、誰かが声を真似て騙っているのではないだろうか。食べているものは本当にトーストなのか、鼻腔をくすぐるバターの匂いはそれに似せた何かではないのか。もしかしたら自分は、とんでもないものを食べさせられているのではないか。

人間は、自己と他者を比べなければ存在できない。

それは優劣なんてものではなく、まさしく境界線の認識であり、それを失った人間は何かしら狂ってしまうに違いない。

その役割の大部分を占める視界は、俺のような弱い人間を辛うじて世界に繋ぎ止める。

——そうか、この目の前の暗闇は暗闇ですらなかったのだ。

黒で塗りつぶされている、なんて生易しいものじゃない。
俺は、黒色でさえその瞳孔に感じないのだから。

こんなわるいゆめは、はやくさめないといけない。
さあ、瞳、めくら現実に戻ろう。
瞳を閉じて、また開けば、お前の世界が待っている。

瞳を閉じた。

目蓋を開ける気にはなれなかった。

#2 瞳の裏に広がる虚無（後書き）

正直言つて、このペースで章をいちいち変えてたら、最終的に30章前後になりそうで怖いです…一日一章を目安に書き込んでいるので、限界があるのは仕方ないんですが…まとめて投稿すればよかったですね（汗）

目標、毎日更新。

#3 イワカンって、なんだ

#

—— 一体何分の間そうしていただろうか。

気がつくと、目蓋越しに朝の零れるような日差しを感じた。
： 今度こそ、夢から覚めたんだ。そう信じて目を開けると、期待を裏切ることなく、見慣れたクリーム色の天井が目に入ってきた。
あれから意識が落ちた記憶は無い。あるいは自分でも気がつかないうちに眠ってしまったのかもしれないが、それは全くどうでもいい話だった。

自分の世界が戻ってきたんだから、そんな些細なことは気にするべきではない。

自分は自分のままで居られる、それだけで儲けものだ。

体を起こすと、眼球の奥底に刺すような痛みを感じた。思わず頭を抱えて左右に振る。それっきり、頭痛はしなくなった。そうだ、それでいい。

俺には霧摘瞳きりつみ あきらという俺の日常があるのだから。

ベッドから這いずる様に出た後、寝巻きとして着ていたジャージとＴシャツを脱ぎ捨てて。我が家のしきたりとして、学校のある朝、居間で食事をする際には必ず、制服を着用しなければならなかった。きちんと糊の利いたＹシャツはあまり好きではなかったが、母はきちんとした性格で、週末になると必ず自分で洗濯物を新品同様にす

るのだった。母の実家がクリーニング経営店だったこともあるのだが、まあ、その点は生まれる前の事を恨んでも仕様がな、というものだ。毎週月曜になると、この独特の微かな匂いに憂鬱にさせられる。

…週の始まりを嫌でも実感させられるのは、学校に着いてからでいいのに。

嘆いても何も変わらない。何より自分は、中学生のときからこの匂いに慣れきってしまったている。憂鬱は既に習慣化し、月曜日は糊の香りがしないと月曜日とは呼べない、というひどく滑稽な体になってしまった。

今日もいつもと変わらない一日、日常に飲まれていく。

もちろんそれは学生の自分にとって当たり前のことだし、それはおおよそ、卒業までの日々まで変わらないはずだ。

しかし今日の俺は、そんな日々が今日を境に容易く瓦解してしまうような、そんな錯覚に捕らわれていた。

ひどく、夢身が悪かった所為だろう。

日常の崩壊を望まない俺にとって、その錯覚は恐れるものでしかなかった。

…当たり前の世界が壊れてしまうなんて、迷惑のほかのなんでもない。

これ以上無駄な思考は止めよう。

そうやって脳の不安に終止符を打ち、自分の部屋を後にする。

Yシャツの香りは、いつもどおりの澱粉の香りだった。

居間に下りると、まずテーブルに置かれた朝ごはんに目がついた。

普段どおりならば、俺が起きてきたことを確認されてから器に注がれる朝食。しかし今日に限っては、既に注がれた食器の上にはラップがかけてあり、横にメモ程度の置手紙があった。

可愛いピンク色のメモ用紙には、「遅刻（暫定）」と書かれてある。

壁に掛けられた時計を見ると、そのデジタルディスプレイには10時半を告げる表記。

どうやら、悪夢というやつは遅刻までも促してしまったらしい。

とことんタチの悪い冗談だった。

家には、恐らく自分以外には誰も居ない。朝早く出勤する父はまだしも、母は既に趣味の園芸教室に向かった後らしかった。

冷えた朝食を無言でかき込む。味噌汁は冷えてしまふともものすごく味気ないものになってしまふようだ。それでも寝坊した自は何も言える立場ではない。まず、文句を言う相手が見つからないだから、どうしようもない。

流し台に食器を放り込んだ（と言っても、きちんと洗った上でのことだが）後、やることも無いのでテレビを点けてみる。もうこの時点での遅刻は暫定ではなく確定事項になってしまった。いまさら足掻いてもどこかの能力者のように時間を巻き戻せることは出来ない。それならば、とことん遅れてやるか、サボってしまふかのどちらかだ、と俺は開き直った。

それなりに大きい液晶には、普段の朝のニュースとはまた違った印象のニュース番組を放映していた。どちらかといえば、家事を一通り終えた奥様向けの情報番組。朝のNHKニュースのような簡潔なものではなく、日常の疑問や難しい単語などの説明を取り入れた方式の番組だった。

それなりに有名なニュースキャスターが表情豊かに日々の出来事を解説していく。

ふと目に止まったのは、物騒なキャッチコピーを画面上に載せて説明する彼女の姿。

「連続殺人犯の謎の死」というレツテルの元、不安げにニュースキヤスターと出演者による会話が始められていた。

「昨夜未明、都内の公園でその存在が市民を脅か^{おびや}していた連続殺人事件の容疑者、指名手配中の男が何者かによって殺害される、という事件が起きました。男の遺体は激しく損傷しており、また周囲に争った形跡があることから、警察は犯人は刃物のような凶器で男と争った際、誤って胸を刺して殺害したとみて、捜査を進めています」

何かがおかしい。そう、漠然と思った。

おかしい点は全く無い。しかし、自分の中で何かが違うと誰かが訴えている。

いくら考えても、不自然な点はない。ただ単に、犯人の餌食に掛かったのが凶悪犯罪者だっただけだ。今のご時世、殺人自体はそう珍しいことではないだろう。ニュースになっただけで、今この瞬間にも誰かが死んでいるかもしれないのだから。

この世で起きている殺人事件の被害者は、「事件」として報道されている人数の四倍、になるらしい。そうアメリカの学者さんが言っていたような覚えがある。

大抵は行方不明者、身寄りの居ないホームレス、勘当された若者など、あまり事件自体が発覚されにくい人間がその犠牲となる。死体は隠匿され、人知れず腐敗していく。山にハイキングに来た登山客が屍を誤って踏んでしまうこともあったらしい。日本は平和だと思われがちだが、実際には知らないだけで、死なんてそこら辺に転がっているものではないだろうか。そう考えると、真に平和な場所など無いのかもしれない。

画面では引き続き、解説者による詳しい説明が行われている。俺は

その初老の男性の発する声に耳が離せなくなっていた。

「今回の特徴的な点は、被害者が巷を騒がせていた連続殺人事件の犯人、という点です。被害者は先月から定期的に繰り返されている通り魔事件の容疑者であり、2週間ほど前から行方不明となっていました。昨夜遺体で見えられたということですね」

「その遺体について不審な点があったということですが、それはどういった点なのでしょう？」

「はい、遺体はかなり損傷が激しく、DNA検査を行って初めて被害者本人だと確認できたそうです。また直接的な死因が、外傷によるものではなく血液を大量に失うことによるショック死だったということが、解剖の結果確認されました。しかし不審な点は、現場にはそれほど血液が発見されなかったんです。これらの点から検証すると、何処か別の場所で被害者を殺害した後、わざわざ都内の公園まで運んできたことになります」

「なるほど、運搬する理由がわからない上に、何故遺体を隠そうとせず、公園という場所を選んだのか、そこも気になるポイントですね」

「そういうことです。…しかし、本当に物騒な世の中になりましたね。皆さんも夜間の外出には気をつけて、なるべく人通りの少ない道は避けるように注意してください——」

先程まで一字一句注意して聞いていたはずなのに、いざ終わってしまうとテレビの音など、全く耳に入ってこなくなった。

都内の公園で見つかった死体は、連続殺人の犯人のもの。激しい体の損傷、著しく失われた血液。

まんまるな月、切り裂かれた屍、音の無い空間、光の消えた公園。骸の腕に喰いついた、キレイな——

キレイな、…何だ？

自分は、何を考えている？

ただの殺人事件のヴィジョンに、自分は何を妄想している？

おおよそ現実離れた光景に、別れを告げる。

俺は、相当疲れているようだった。全て夢の所為にしたかった。きつと何か俺に取り憑いて、根こそぎ思考能力を奪ってしまったに違いない。たまにはこんな日もあるさ、と笑い飛ばせない自分が恨めしかった。

気になるニュースの内容。自分には関係の無いことだと思いつつも、つい無意識のうちに場所を確認しているあたり、俺は野次馬根性だけは一人前らしい。

画面に映っていた風景は、見慣れた町外れの公園。学校からさほど遠くもなく、都合の悪いことに寄り道にはうってつけだった。

「……馬鹿らしい」

俺は、あほらしい計画を打ち捨て、学校へ行くべく準備をした。

日常の象徴ともいえる、つまらない生活へ。

#4 瓦解する何か（前書き）

グロ注意です。相変わらず話が唐突過ぎ。

#4 瓦解する何か

#

「はあ……」

呆れた。自分でも頭がおかしいんじゃないかと思ってしまうぐらいに。

俺は、既に件の殺人事件の現場となった公園の近くまで来ていた。思ったより、自分には野次馬根性がたつぷりあったらしい。学校が目の前に見えているくせに、公園へと続く道に迷わず歩き出すのだから、本能はやはり好奇心旺盛なのだろうか。

心に何かもやもやしたものを抱えたまま、結局心中知らずの体は律儀に今後の予定にそぐわない行動を取ってくれた。自身の思考と行動がこれほどにまで噛み合わないのは、これが生まれて初めてだった。

足は、変わらず日常の象徴から遠のき続ける。後ろ手に校舎が遠く小さくなるのを感じ、皮膚を刺すように照り付ける日差しは、俺の判断を咎めるように一層強くなった気がした。

俺は、一種の気分転換だと思っていた。

無意識に体がそう望んでいるのだ、と信じて疑わなかった。

その何気なしの判断が何を変えるのか、今の俺には知る由も無かった。

先ほどから、体が自分のものでなくなったような、体の一部を支配されてしまったかのような気分が脳で立ち往生している。家を出た

辺りからだろうか、胸から何かが溢れ出てしまいそんな錯覚が絶えず続いていた。まるで心臓が限界まで膨張してしまったかのように、どくん、どくと脈打つ。苦しくは無いが、痺れた体を無理やり動かしているようで気味が悪い。

暑さでやられたかもしれない。兎にも角にも、今日の俺はとても正常な体ではなかった。今までに味わったことの無い、体の隅々を制圧されたかのような感覚。言葉に出来ない奇妙なこの居心地は、敢えて言葉にするならば、自分の意思で歩いていることに変わりはないが、まるで指導者に了承を得なければ自ら行動できない奴隷のようだった。

誰かの合意の下、こうして歩いているような錯覚。何かに縛られた上で、『自分の意思で行動しているつもり』の俺。

…馬鹿馬鹿しい。

そもそもこれは錯覚なのだから、この体を支配しているのは自分だけしかないじゃないか。他に誰がいるというんだ。

俺は頭の中の泥のような妄執を振るい落とすように、頭をぶんぶんと振った。

少しだけ、眩暈のような立ちくらみを覚えた。

町外れの公園へと続く道は事件の影響もあってか、人気はあまり無かった。

そこを通る人間は恐らく、やむを得ず通っているか事件を知らないかのどちらかだろう。

好き好んで人間の死んだ場所に立ち入る奴は、俺くらいのものだ。用も無いのに墓場に赴くことはないように。気味の悪い殺人にかかわりたくないように。

…自分の日常でないものは、夢のようなものだ。だれも悪夢を進んで見ようとはしない。

例えば、今までの日々の生活は実は嘘でした、と誰かに言われたとする。

例えば、君は本当は人工知能を持った擬似生命体で、君の送っていた生活は、只のテストを兼ねた仮想空間でのシミュレートに過ぎない、と突然現れた科学者に告げられたとする。

それは間違いなく、今まで見たことの無い現実^{ゆめ}であり、俺はその現実^{アル}を信じる事が出来なかったとする。

唐突に現れた自分の知らない自分^{げんじつ}は、夢のように覚めたりしなかったとする。

多分、俺は俺を否定し続ける。

否定したことが、日常に摩り替わるまで、俺は夢の中を彷徨う。

Ifの話は好きじゃない。

自分が自分であることに自信がなくなるから。

公園は、周りを建物で囲まれた、それは寂れた孤独な空間だった。無人で、そこだけ都会の喧騒から切り取られたかのように静かで、おおよそ遊び場という役目を果たしているのか疑わしいものだった。空き地と読んだほうが相應しいかもしれない。

『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたビニールテープが、すぐそばのゴミ箱に丸めて捨ててあった。公共の場、そして人が集まりやすい場所ということもあってか、現場検証は既に終わった後らしい。夏の強い日差しが、遊具らしい遊具の無い其処を隅々まで晒していた。

俺は、ぶらぶらとあたりを散歩するように巡ってゆく。多分、通りすがりの人が見たら、俺の姿はきつと心此処にあらず、といった風に目に映るだろう。何かに操られたかのような足取りで、しかし自分の意思で足を動かす。

体は驚くように軽く、まるで自分の物ではないかのように『歩け』
という命令に従う。重さという感覚が存在しないような気分だった。

右手に見える銀杏の樹木の下に、ドラマなどでよく見かけるチョコークで人型に縁取られた跡があった。白いチョークの粉に混じって、コールドールが染みこんだような跡が目立つ。少しだけ、あの赤い液体特有のさびた鉄のような匂いが鼻を突いた。

きつと、此処で被害者は骸に成った。何を思っただけ息絶えたのだろう。死にたくない、だろうか。或いは今まで手に掛けてきた人たちへの懺悔を呟いただろうか。知りたくも無かったし、知る術も無かった。その人型の傍にしゃがみ込み、そつと赤黒い染みを撫でた。一瞬、殺人鬼の狂気じみたものが心に入り込んでくるような気がした。

何故か自身に湧き上がる、『憎い』という感情。それは彼を殺した人間に対してか、それとももつと人を殺したかったという未練か。憎い、全てが憎い。俺を取り巻く世界、嘲る様な視線で俺を嘗め回す奴ら、獲物の悲鳴、俺を拒絶し逃げ回るエモノ、ナイフを持つ腕に纏わり付く感触、滴り落ちる血、事切れた死体、何も言わない屍、何も写さない濁った瞳、憎い、憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い憎い憎いニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイ――

ニク

イ

二

ク
イ

二

ク

気がつくと、体は地べたに四つん這いになり、全身からは汗が噴き出していた。

体中の汗腺を一齐に開放したかのようなとめどない汗。針が全身を突き刺すような鋭い痛み。蛇口を緩めたかのように滴り落ちた滴は、地面に赤黒い染みとはまた違った色合いの斑点を描く。

おぞましが止まらない。足はがくがく震えだし、制御が利かない泥沼に嵌り込んで抜け出せないように、気持ち悪さが俺の体に纏わり付く。いや、果たしてこの空気は、気持ち悪い程度で収まる代物なのか。

夏の日差しの真っ只中だつていうのに、辺りが暗く感じられた。周辺が雲に覆われたわけでもなく、それが直ぐに自分の眼が機能しなくなっているからなのだと実感する。何せこちとら、視力不調は今朝に経験済みだ。あの感覚は今日明日単位で忘れられるわけが無い。目の前に広がる虚無の闇に、自分自身の荒い息の音が絶えず響いた。

——視界は急に開けた。

唐突に周りが明るくなり、瞳は痛みを訴えながらも光を取り込もうとする。

時間にしてわずか10秒、いや、もっと早いかもしれない。予想外の回復に一瞬ひるみつつも、辺りを見回す。

そこは、先ほどまで俺が居た寂れた公園などではなかった。真っ白な空間、遠くを見れば地平線など存在しないかのように、完璧に真っ白な空間だった。

……いや、語弊が在^あった。

真つ白な、地面と空間の境も分らないくらい純白の世界に、ひとつだけ一狂うように赤い華が一輪。《・・・・・・・・》それは、ピンクだか白だか分からない色の茎を持ち、黒い艶のある葉を周囲にふわりと広げ、真つ赤な花弁はそれらよりも大きく地にぶちまげられ、ミミズのような太いぐちゃぐちゃした根を辺りに巡らせ、肌色のおしべとめしべは、力無くぐつたりと下に投げ出されていた。

彼女は人間はこのような形だったのか、それさえも曖昧にさせる程の容姿で、其処に咲き果てていた。

近寄る。

近寄る。

近寄って、彼女の四肢を見つめる。

ひざから崩れ落ち、傍らで彼女をじつと視^みつめる。

べしやり、と血液が服にへばりつく。それさえも厭わない。そんなことはどうだっていい。

その少女は、完膚なきまでに殺しつくされていた。

華奢だったろう腹を割かれ、折れた肋骨を上突き出し、五臓六腑をためらう事無く吐き出している。

腕や足は切り取られ、辺りに引きずり出された内臓の代わりに、オブジェのように腹に突き立てられていた。

その無造作に突き出された手には、彼女自身の首があった。

黒髪をその指に絡ませ、ちょうど腕からぶら下がる様にして、彼女は佇んでいる。

淀んだ瞳と目が合った。正確に言えば、動くことの無い視線の先に自分がある。

血に塗^{まみ}れた顔。その瞳から、涙のような赤い液体が滴り落ちる。

彼女は、何故か笑っていた。

自分がどうでもよくなってしまうたかのように。

ゆつくりと解体され、尋常ではない痛覚の訴えに思考がパンクし、叫びに叫んだ拳句誰も助けに来なかった事を恨み、それでも体を切り開かれてゆく痛みは脳の回路を焼き切り、気が触れ、仕舞いには笑いが止まらなくなり、自分が死の淵にいることも忘れ、事切れるその瞬間まで狂ったようにワライ続けた結末。
そんな表情を浮かべていた。

彼女の頬に触れた。

冷え切った滑らかな肌は、もはや人間のそれではなかった。

その肌は、解体され羽を聳られた鶏肉の皮膚に近い。

真っ白な表面を、静かに赤すぎる血が流れ落ちた。

彼女は既に、人間を真似た肉の塊としか思えない。

しかしそれにしては出来すぎた頭が、こちらを向いて笑っている。

——あたまが、ぼんやりする。

ぐるぐる回って、平衡感覚を失ってしまったかのような気分。

何かの衝動に駆られて、体が動き出す。

ゆつくりと、その場に倒れこむように。

夢だ。

これは夢だ。俺がこんな惨殺死体を見る機会なんてあるわけが無い。まず、少女のなにかもぐちゃぐちゃな骸を見て、普通は気が触れないわけが無いだろう？

現実で無いんだから、当たり前だ。これは夢であり、別に不思議なことではない。

——なら、今の俺が、現実の俺でない考えを持っていてもおかしくない筈だよな？

何故なら、俺はあまつさえ、

そのあかいはなの

はなびらを

なめたい、なんておもってしまっているのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1635i/>

赤いタマシイ/become to vampire

2010年10月9日03時05分発行